

第 1783 回（4 月 27 日）

農業資材産業の生産変動要因

——産業連関モデルによる分析——

薬師寺哲郎・佐藤孝一

農業資材産業は、アグリビジネスの一部として農業との深い結びつきの下で生産が行われている。産業間の投入・産出関係から見れば、農業資材産業はその生産物の農業への産出という形で農業と結びついており、この関係を通じて農業生産の変動の影響を受けることになる。

しかしながら、農業資材産業の生産物の産出先は必ずしも農業部門に限られる訳ではなく、農業以外の部門にも大きな産出先がある産業もある。また、近年では、輸入との関わりも強くなってきている。そのため、農業資材産業の生産は、農業生産の変動の影響だけでなく、それ以外の要因の影響も大きく受けていると考えられる。さらに、長期的な視点から見ると、技術構造も変化していると考えるのが妥当である。

以上の観点から、産業連関分析の均衡産出高モデルを用いて、1980 年から 1995 年までの 15 年間に於ける農業資材産業の生産額変動要因を、農業生産の変動のみならず、技術構造の変化、国内最終需要、輸出及び輸入の変動といった要因も考慮し、全 11 要因に分解して分析を行った。

産業連関モデルを用いたことにより、生産額変動の産業間の波及効果をも考慮した要因分解となった。つまり、例えば国内最終需要の変動の影響について言えば、当該資材産業の国内最終需要の変動のみならず他の産業の国内最終需要の変動が波及して当該資材産業の生産額変動に及ぼした影響も明確に把握することができた。

このような分析の結果、以下の点が明らかとなった。

(1) 農業部門の変動は農業資材産業の生産額変動に大きな影響を及ぼした。しかしながら、その影響は、農業部門の生産額変動の影響のみならず技術構造の変化、すなわち農業部門への投入係数変動の影響も大きかった。いずれの影響が相対的に大きいかは産業及び時期によって異なるが、概して農業の生産額変動の影響の大きかった産業は、飼料作物、飼料である。それ以外の産業（種苗、獣医、農業サービス、有機質肥料、化学肥料、農薬）は、農業への投入係数変動の影響の方が概して大きかった。

(2) 農業部門以外へも産出している産業は、一般経済状況に応じて国内最終需要の変動の影響が農業部門の変動の影響よりも相対的に大きくなることがある。例えば、1980 年代後半の種苗と獣医の生産額増加である。ただし、この時期のこれらの産業も他の産業との比較でみると農業生産変動の影響を最も大きく受けた産業のひとつとして位置づけられることに変わりはない。

このように国内最終需要の変動が他の要因よりも相対的に大きくなるという状況は、1985 年から 1990 年にかけての内需中心の高成長の期間においては、農業資材産業以外の多くの産業でもみられた。

(3) 1980 年代後半以降輸入係数の増加が及ぼす影響が大きくなってきた。これは、獣医と農業サービスを除く全ての農業資材産業に対して程度の差はあるものの生産額を減少させる要因として働いている。輸入については要因と考えるべきかどうかという問題は残るが、この間、円高の進展を背景として輸入が増加したことを考慮すれば、要因として位置づけることも妥当性を持つ。